



Title	ドイツ語疑問文のイントネーション
Author(s)	滝沢, 迪子
Citation	北海道大學文學部紀要, 19(3), 1-26
Issue Date	1971-03-30
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/33361">http://hdl.handle.net/2115/33361</a>
Type	bulletin (article)
File Information	19(3)_PL1-25.pdf



[Instructions for use](#)

# ドイツ語疑問文のイントネーション

滝沢 迪子

## ドイツ語疑問文のイントネーション

滝 沢 迪 子

0. ことばのアクセントやイントネーションが、子供がことばをおぼえる際の比較的はやい時期に修得されるものであることを考えるとき、そこには生成文法理論がシンタクスについて行ってきたのと同様のある体系の存在が考えられる。疑問文のイントネーションは、このイントネーション体系のうちで多くの特徴を提示する領域であると思われるので、本稿ではこの領域を調べてみたい。

1. ここで扱う疑問文は、用法上ではなく、構造上疑問文の形態をもつ文である。<sup>注①</sup>

イントネーションは次の諸要素によって決定される：

1) アクセント型

2) 分節法：これは種々の境界標示記号(Grenzsymb<sup>ol</sup>)によって分けられる。この境界標示記号はシンタクスの表層構造によって直接決定される。

3) 疑問及び強調形態素

このような、直接イントネーションに影響を及ぼすシンタクス要素をS I M (Syntaktische Intonationsmarker) とよぶ。

疑問文がすべて基層構造(Basisstruktur)に疑問形態素Qを持つことを、Katz-Postal が „An Integrated Theory of Linguistic Description“ (M. I. T. Press 1964) において示している。<sup>注②</sup>

形態素Qは疑問文のイントネーションにも影響を及ぼすが、疑問文の表層構造にあらわれる場合と深層構造にとどまる場合があるので、このQが表層構造にあらわれる場合の条件が必要となる。

ドイツ語の疑問文の構造は、次にあげる性質が複雑に組み合わさっ

て特徴づけられる。

- 1) 疑問詞 (W)
- 2) 動詞が文頭へくる。
- 3) 疑問イントネーション (文末の上昇調)
- 4) 二者択一 (Alternative)

2. 1. 次に、これらの性質がどのように夫々の疑問文にあらわれるかを表で示す。

表1

疑問詞	疑問イントネーション	動詞文頭	二者択一	タイプ
-	-	+	+	(a)
-	+	+	-	(b)
-	-	+	-	(c)
-	+	+	-	(d)
-	+	-	-	(e)
+	-	-	-	(f)
+	+	-	-	(g)
+	+	-	-	(h)
-	-	-	-	(i)

この表の各タイプの文は以下の通りである。

疑問イントネーションは(↑)で示す。

(1)

- (a) Hast du das Buch oder das Heft gekauft (↓) 二者択一疑問文
- (b) Ist das ein Buch (↑) 決定疑問文<sup>1</sup>
- (c) Ist das ein Buch (↓) 決定疑問文<sup>2</sup>
- (d) Verstehen Sie mich, wenn ich langsam spreche (↑) 決定疑問文<sup>3</sup>
- (e) Sie hätten einen Unfall (↑) Echo - 決定疑問文
- (f) Was hat der Mann geraucht (↓) W<sub>1</sub> - 疑問文
- (g) Was ist unter dem Fenster (↑) W<sub>2</sub> - 疑問文

(h) Und <sup>2</sup>was kann man dagegen <sup>1</sup>tun (↑) W<sub>3</sub>-疑問文

(i) Er hat das Buch gelesen (↓) 叙述文

文の上の数字は音の高さをあらわす。

(c)はLinguaphoneにのみ認められたタイプで、決定疑問文は後にのべるように(↑)のタイプだけではなく、下降でおわるタイプもあることになる。(d)は決定疑問文に属するが副文を伴うもので、この副文がたとえば: Hast du gerade Zeit, damit ich dir deine Reiseroute Punkt für Punkt beschreiben kann?のように長い場合でもなお文末に(↑)が残る。(h)は疑問詞の前に接続詞が置かれた文である。

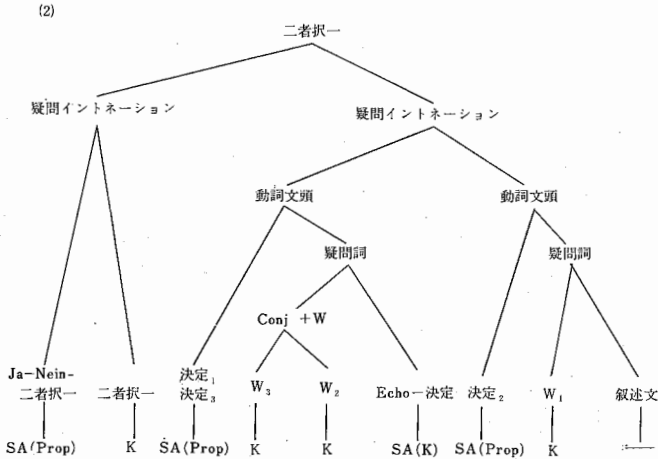
2. 2. ところで、これらの疑問文の構造に対して答の形が重要な意味をもつ。注②でふれたように答の基層構造は疑問文の核によって決定される。しかし、この基層構造は疑問副詞のかわりに、JaないしNein…Negと更にいくつかの成分から成る。答の文はここからいくつかの成分を消去して、副詞Ja, Neinと質問の対象である成分だけが残される。すくなくとも文の深層構造は①SA (Satzadverb)と②Prop (Proportion)というその他の成分から成る。従って答の文は、SA、つまりJa, nein, bestimmt等とK、つまりPropを含む任意の成分、およびProp、つまり消去できない成分であらわすことができる。これを表1の特徴による分類を用いて図示すると(2)のようになる。なお、これら表1にあげた特徴のほかに(g)、(h)の文を区別する特徴Conj+Wも用いる。

なお、二者択一疑問文は更に分けてHast du das Buch gekauft oder nicht.のようなJa-Nein-二者択一疑問文とその他の二者択一疑問文とした。

枝分れ図の左の枝がプラスを右の枝がマイナスをあらわす。( )は撰択である。この図によって次のような答えと疑問文の関係が明らかになる。Ja-Nein-二者択一疑問文、決定疑問文<sub>1</sub>、決定疑問文<sub>2</sub>、決定疑問文<sub>3</sub>は答えとしてSAおよび疑問文の核によって随時決定される

文をとる。二者択一疑問文、 $W_1$ -疑問文、 $W_2$ -疑問文、 $W_3$ -疑問文は  
 答えとしてKのみ、ないしKを含むPropをとるがSAはとらない。

Echo-決定疑問文は両者の中間にある。



2. 3. 先に疑問文の基層構造はQ+核であるとのべた。従って  
 核の構造が疑問文の種類を決定するはずである。核の構造と疑問文の  
 構造の関係はKatz-Postalが行った「疑問(F)の前提(V)」によって展  
 開できる。(a)から(i)までの疑問文は次のような前提をとる。

(3)

- (a) F: Hast du das Buch oder das Heft gekauft (↓)  
 V: Entweder du hast das Buch gekauft oder du hast das Heft gekauft.
- (b) F: Ist das ein Buch (↑)  
 V: Entweder das ist ein Buch oder das ist kein Buch
- (c) F: Ist das ein Buch (↓)  
 V: Entweder das ist ein Buch oder das ist kein Buch

- (d) F : Verstehen Sie mich, wenn ich langsam spreche (↑)  
 V : Entweder Sie verstehen mich oder Sie verstehen mich nicht, wenn ich langsam spreche.
- (e) F : Sie hatten einen E Unfall (↑)  
 V : Entweder Sie hatten einen Unfall oder Sie hatten etwas anderes.
- (f) F : Was hat der Mann geraucht (↓)  
 V : Der Mann hat etwas geraucht.
- (g) F : E Was ist unter dem Fenster (↑)  
 V : Unter dem Fenster ist x.
- (h) F : Und(E) was kann mandagegen tun (↑)  
 V : Conj. + Man kann etwas dagegen tun.

(3)(g)、(h)のVにみられるxは、いくつか集ってNPをつくる個々の形態素の任意の連鎖である。

(3)(b)、(c)はVが同じであるからイントネーションは分節法以外の影響によって決ったと考えられる。このイントネーションはドイツ語で通常みられるものと思われるのでここではこのままにして、今後問題が生じた時に別個に扱う必要があるかどうかを決めることにする。(3)(d)のVをみるとEntweder Sie verstehen mich oder Sie verstehen mich nicht, wenn ich langsam spreche. となりwenn ich langsam spreche が外へ出てしまう。これは副文の部分が更に長いHast du gerade Zeit, damit ich dir deine Reiserute Punkt für Punkt beschreiben kann (↑)についてみるとVはDu hast gerade Zeit oder du hast gerade keine Zeit, damit ich dir deine Reiserute Punkt fürPunkt beschreiben kann. となり同様にdamit 以下は外へ出てしまうので、副文がいかにか長くとも(d)のイントネーションは(b)の一般的な決定疑問文と同じであると考えてよい。従って今後(d)は注⑤(b)と一緒に扱う。

2. 4. Eは強調(Emphase)を示す。強調の条件を調べるため

には、文脈をも考慮に入れる必要がある。強調を説明するには、次のような仮定が便利である。<sup>注⑥</sup>形態素または形態素の連鎖  $x$  は文  $S$  の成分  $K$  をなす。この  $x$  が強調形態素  $E$  の影響をうける。  $E$  を導入するための条件は、  $S$  と  $K$  の最終連鎖のみ異なる文  $S'$  の使用である。  $K$  が  $S'$  において、ほかの形態連鎖を支配すれば  $S$  は  $S'$  の „Paradigmatische Korrektur“ となり、  $K$  が  $S'$  において形態連鎖  $x$  を支配すれば、  $S$  は Echo- 疑問文となる。つまり、  $S$  と  $S'$  は叙述文とこの文の否定、または叙述文と疑問文の関係にある。

Echo- 疑問文の例をあげると：

- (4)(a) Das war ein Flugzeug.  
 (b) E Was war das?  
 (c) Das war ein E Flugzeug.  
 (d) Das war ein E Flugzeug ?

はじめの3つの文はそれぞれ次の文の  $S'$  である。

さて、ここで  $E$  ないし  $(E)$  をもつ3つの文(3)(e)、(g)、(h)の文脈について  $S'$  が存在するかどうか、また  $E$  が必要かどうかを調べてみる。

(e)

- (5)(a) Herr Kato, ich habe gehört, Sie hatten einen Unfall?  
 (b) Ja, es war aber nicht schlimm.

この場合  $S'$  を直接この会話の中に見出すことはできないが *ich habe gehört* の内容として第三者が時間的にへだたった時点で発言した „Herr Kato hatte einen Unfall“ を容易に想像できる。この会話の外にある *Herr Kato hatte einen Unfall* を  $S''$  とすると、対話の相手を第三者から Herr Kato にかえることによって、つまり  $S''$  の主語を3人称から2人称へかえることによって、 $S'' \rightarrow S'$  となる。従って(3)(e)は：

- $S'$  : Sie hatten einen Unfall  
 $S$  : Sie hatten einen Unfall? となる。

このように見てくると(3)(e)は強調形態素  $E$  をもち、 $x$  は *Unfall* であるから  $Ex$  となる Echo-決定疑問文である。



(h)

- (6)(a) Wo ist das Fenster<sup>4</sup>?  
 (b) Der Tür<sup>3</sup> gegenüber.  
 (c) Was ist unter dem Fenster<sup>4</sup>?  
 (d) Ein Heizkörper<sup>3</sup>.

ここでは(5)(a)に相当する。S'ないしS''を含んだ文が先行しない。(6)(b)のDer Tür gegenüberは(6)(a)の答えであって(6)(c)とは直接なん等関係がない。また(6)(a)ですでにFensterが出てはいても、これも(6)(b)のS''とはなり難い。従ってここには強調形態素Eの入る余地はないかのように見える。しかし、疑問文(g)の前提(g)VはUnter dem Fenster ist x. であって形態素の連鎖xを有している。このxの説明のために(3)(f)をみると(f)Vに具体的に何かをささない成分があることがわかる。この成分は未定のProの形をとっている。VではこのPro形がJemand, etwas等の不定代名詞となり、FではQの影響によって疑問代名詞Wer, Was等となる。答えは従ってこのPro要素の代りに具体的に何かをさし示す成分を必要とする。このことをふまえて再び(g)をみると、xは一定の、しかし知られざる形態素であるとされているので先にのべた強調の規則によってその前にEを与えられる。Exは同様にQの影響によって疑問代名詞となる。(3)(g)はEcho-W疑問文である。以降W<sub>1</sub>-疑問文、つまり(3)(f)をW-疑問文、W<sub>2</sub>-疑問文、つまり(3)(g)をEcho-W疑問文とよぶ。

(i)

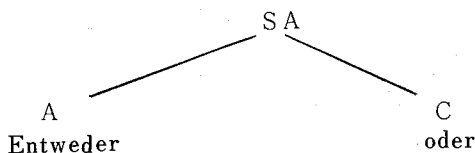
- (7)(a) Mir ist aufgefallen<sup>2</sup>, daß es hier<sup>2</sup> auch im Sommer<sup>3</sup> keine gleichbleibenden Temperaturen<sup>3</sup> gibt. Wirkt der häufige Wechsel<sup>3</sup> nicht auch belastend auf die Gesundheit?  
 (b) Früher<sup>1</sup> habe ich das<sup>2</sup> überhaupt nicht gemerkt. Mit zunehmendem Alter<sup>2</sup> spüre ich es auch.  
 (c) Und was<sup>3</sup> kann man dagegen tun<sup>2</sup>?  
 (d) Ich trinke dann<sup>3</sup> Kaffee<sup>1</sup>.

ここでも(6)と同様に文脈の中からはS'を見出せないで(h)VをみるとConj+man kann etwas dagegen tnn のetwasは(3)(g)の説明でのべたようにPro-形が不定代名詞となったものである。これはFではQによって疑問代名詞となる。しかし、(3)(g)Vではこの、具体的になにかをさし示さない成分はxであり強調形態素Eを導入する規則によりExとなったものに対して、ここではEをとらない。従って本来ならば(3)(h)は疑問イントネーションをとらないW-疑問文のはずである。しかし、数多くのUnd+W-疑問文が疑問イントネーションをとっているためこの現象は und の影響かとも思えるが、(3)(h)Vでも und はConj+man kann etwas dagegen tunというように文構造の中に入らない以上、この und の影響も除外すべきであろう。このような場合、疑問イントネーションを与えられる理由として考えられるのは丁重な表現のために文末をあげることである。文頭の und も疑問全体の直接性をやわらげる役割を果たしている。この丁重な表現は独自の研究を要する領域であるので、ここではこれ以上この問題には触れない。また(2)(h)は一般的なイントネーションの規則を扱ううえで例外にあたるので以後除外する。

2. 5. これまで扱った(3)の(e)、(g)、(h)以外の文の前提Vはすべて離接接続詞Entweder...oderをとる。このうちEntwederは随時消去できる。

この離接接続詞を深層構造の一成分とすると、これはSAの拡大されたものと見なせる。またoderは並列接続詞Cとしても機能するのでBierwisch(1966)に従って次のような構造を仮定する。

(8)



Entweder oder を SA に従属させると決定疑問文の SA は Entweder oder がしめて、自動的に ja, nein をしめだすこととなる。つまり、(9)の(a), (b)のような文は自動的に深層構造から除外される。

(9)

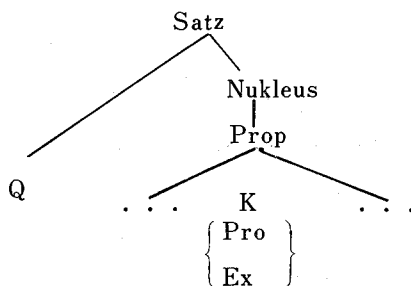
- 注⑦
- (a) \*Ja, ist des ein Buch (↑)
  - (b) \*Nein, ist das ein Buch (↑)
  - (c) Ja, das ist ein Buch (↓)

前提および核に Entweder oder を含む文はこの成分が疑問の対象となり、答えはふたつの与えられた可能性のうちのひとつを選ぶことになる。

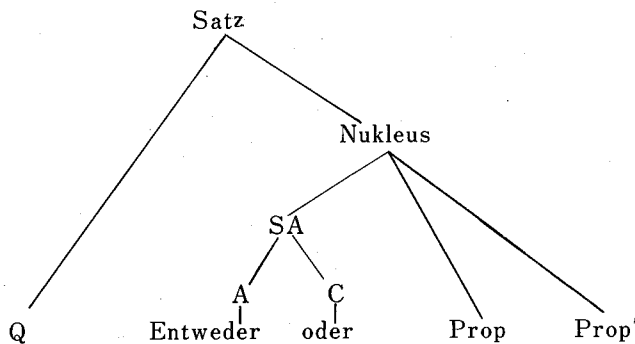
疑問の深層構造には次のふたつがある。

(10)

(a)



(b)

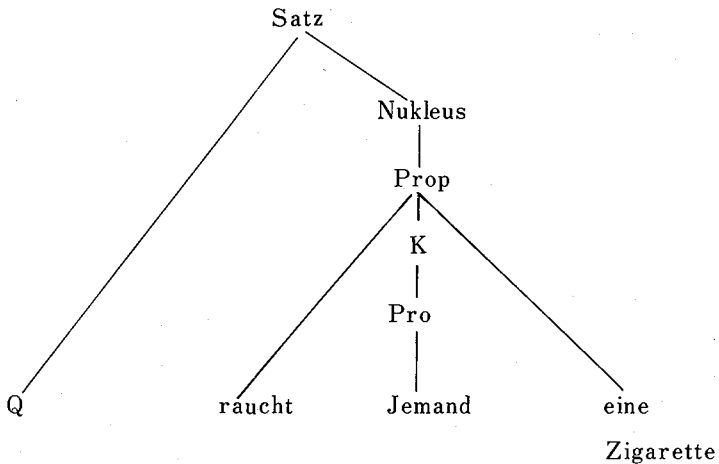


(10)については、Prop' が単に Prop の否定のときは答えは Ja か Nein 及び消去可能な Prop ないし Prop' であり、それ以外の場合には Prop と Prop' がいくつかの成分によって区別される。第2の場合は完全な二者択一疑問文が作られる。この場合、答えは Ja, Nein をとることはなく、すくなくとも両者を区別する文の一部をあげなければならない。

次に(a)から(h)までの文を(10)(a), (b)について調べてみる。

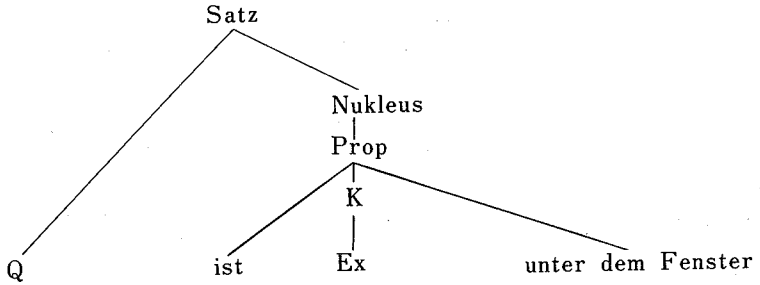
(10(a)に属するものは、Entweder oder をもたない文、つまり先へのべたように具体的に何かをさし示さない成分 x または未定の Pro 形をもつ文である。これは W - 疑問文である(3)(f)と Echo-W - 疑問文である(3)(g)である。

(3)(f)の V は Jemand raucht eine Zigarette であり Jemand という Prop をとるから次の図のようになる。



これを書きかえると Q ..... Pro .....となる。

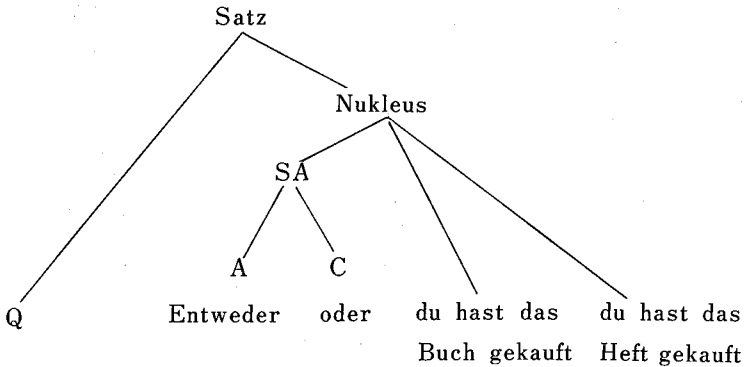
(3)(g)の V は Unter dem Fenster ist x であり、x はすでに見てきたように強調形態素 E をとるから E x となる。



これを書きかえるとQ ……Ex ……となる。

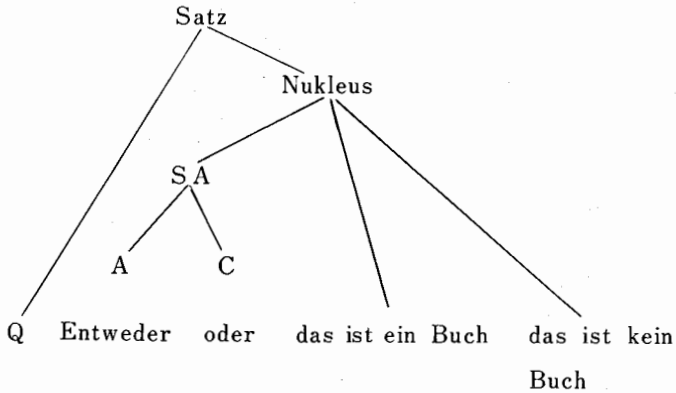
(10)(b)に属するのはVに Entweder oder をもつ文である。

(3)(a)のVは Entweder du hast das Bnch gekauft oder du hast das Heft gekauft. である。



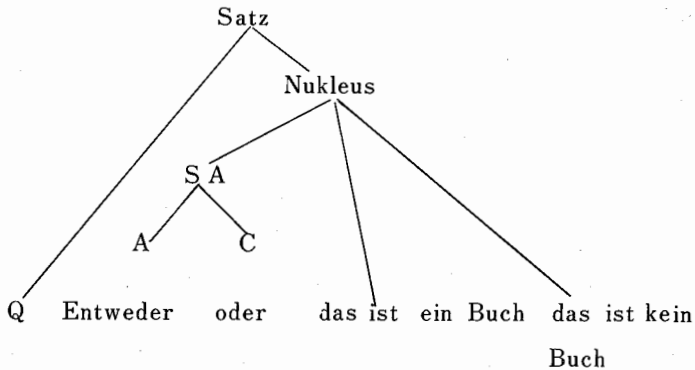
これを書きかえるとQ Entweder oder Prop Prop' となる。

(3)(b)のVは Entweder das ist ein Buch oder das ist kein Buch である。



これを書きかえると Q Entweder oder Prop Neg-Prop となる。

(3)(c)のVは Entweder das ist ein Buch oder das ist kein Buch である。

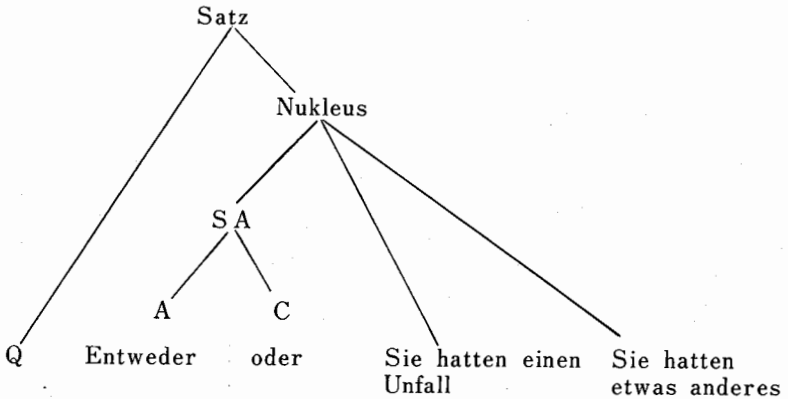


これを書きかえると

Q Entweder oder Prop Neg-Prop となる。

(3)(e)のVは Entweder Sie hatten einen Unfall oder Sie hatten etwas anderes である。Etwas anderes は keinen Unfall を言いかえたものにすぎない。ということは、ここでも Prop' は Prop の否定であることを示している。ただしこの場合は Prop も Prop' も共に文全体の否定ではなく、文の一部分の否定である。この

成分の否定は同時に Prop に強調形態素Eを導入することにもなる。この強調によって答えにおいて疑問の対象となる二者のうち一方の成分をみわけることができる。従って Echo-決定疑問文の答えは SA でも、ある単一の成分でもよいことになる。これはほかの Prop-Neg-Prop の形をとる疑問文では不可能である。この条件をふまえて(3)(e)のVをみると下図のようになる。



これを書きかえると

Q Entweder oder [……EK……] [……Neg-K……]  
Prop Prop

となる。

この(3)の(a)から(h)までの文についての規則をまとめてみる。

(1)

- (a) Q … Prop …………… = (f)W - 疑問文
- (b) Q … E-x …………… = (i)Echo-W-疑問文
- (c) Q Entweder oder Prop Prop' = (a)二者択一疑問文
- (d) Q Entweder oder Prop Neg-Prop = (b)(c)決定疑問文
- (e) Q Entweder oder [……EK……] [……Neg-K……]  
Prop Prop  
 = (e)Echo - 決定疑問文

これによって本稿で扱う疑問文の基層構造が整理されたわけだが、

この基層構造が表1にあげた4つの性質を備えるためには更に変形を行なわなければならない。

この変形のためには、SAに、Qの存在によって疑問の対象となる成分であるという印をつける規則が必要である。またSAがない場合はProp-要素ないしExに同様の印をつけなければならない。このことを考慮に入れると(11)は次のようになる。

(12)

(a) Q .....W-Pro ..... (11)(a)

(b) Q .....W-E-x ..... (11)(b)

(c) Q W-Entweder ..... (11)(c)(d)(e)

2. 6. (3)(a)(b)(c)(e)(f)(g)の各文について変形をおこなう。

(3)(a)のV Entweder du hast das Buch gekauft oder du hast das Heft gekauft. はすでにみてきたように Entweder oder Prop Prop' である。Entweder はA又は(A)、oder はCであるから(A)C Prop Prop' となる。この、前に出ている oder を Prop の間に入れるために次の操作をおこなう。

(T i) (A) C Prop Prop' → 1 3 2 4  
           1 2 3 4

この操作によって(Entweder) du hast das Buch gekauft oder du hast das Heft gekauft ができる。次に Prop' の中の Prop と一致する要素をすべて消去するために(T ii)を適用する。

(T ii) X K Y C X' K' Y'  
           1 2 3 4 5 6 7  
       → 1 2+k 3 4 6+k

条件：X, X' 及び Y, Y' は同じ最終連鎖を支配する同一成分の連鎖である。K, K' は異った最終連鎖をもつ同一成分である。

K及びK'に付随する要素 k は対比アクセントを決定する。





最後に、残ったQを消去する必要がある。これは、先にのべたように二者択一疑問文が疑問アクセントをもたないために必要な処置である。Qと同時にこの規則によってW-Entwederも消去される。Entwederは疑問文において音声上の影響をもたず単に動詞の位置に関係するだけである。

$$(T\ iv)\ o\ \# \underbrace{(Q)\ (W-Entweder)}_{\substack{1\ \quad\quad\quad 2}}\ X \rightarrow 1\ 3$$

この操作をおこなった後にKと、Prop'の一部で、(T ii)で残ったK'とを任意にProp中の一成分としてまとめることによって Hast du das Buch gekauft oder das Heft に Hast du das Buch oder das Heft gekauft の形を与えることができる。

(3)(b)(c)のVは Entweder das ist ein Buch oder das ist kein Buch である。これはQ Entweder oder Prop Neg-Prop の形をとる。これに(T i)(T ii)を適用すると

Q Entweder das ist ein Buch oder kein Buch となる。(T ii)にはK'=Neg-Kならば(T ii)は義務的であり、他の場合には任意であるという条件がつく。

(T ii)で得た形は

(15(a) Q Entweder Prop oder Neg - K + k である。これは Q A Prop oder Neg - K + k である。

このなかの oder 以下を消去する。

$$(T\ v)\ \underbrace{Q\ A\ Prop}_{1}\ \text{oder}\ \underbrace{Neg - K + k}_{3} \longrightarrow 1$$

これでQ A Propは

Q Entweder das ist ein Buch となる。

次に(3)(b)について(T iii)によって動詞を前に出すと

o# Q Y + Fin X つまり

o# Q ist das ein Buch となる。





Q X W-E-x → 1 3 2  
 1 2 3

Q W-E-x unter dem Fenster となる。

動詞 ist を W-E-x の後へいれるために (T iii) を適用するが、W-E-x は SG とみなすことができるので (T iii) を書きかえる。

(T iii) o#(Q) (SA) SG X Y+Fin  
 1 2 3  
 → 1 3 2

これで Q W-E-x ist unter dem Fenster となる。

疑問イントネーションを得るために (T vi) を用いて Q を文末へ移すと Was ist unter dem Fenster (↑) となる。

これまで用いた変形規則をまとめてみると次のようになる。この場合 (T iii) と (T iii') 等をまとめて記す。また (T iv) は最後へまわす等適用の順序に従うようにならべかえた。

(T 1) (A) C Prop Prop'  
 1 2 3 4  
 → 1 3 2 4

(T 2) X K Y C X' K' Y'  
 1 2 3 4 5 6 7  
 → 1 2+k 3 4 6+k

条件：X, X' 及び Y, Y' は同じ最終連鎖を支配する同一成分の連鎖である。K, K' は異った最終連鎖をもつ同一成分である。

K' = Neg-K ならば義務的, それ以外の場合は任意

(T 3) o#(Q) (SA) SG X Y+Fin  
 1 2 3  
 → 1 3 2

条件：Y は語アクセントを含まない。



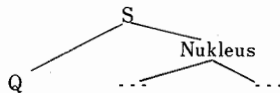
3. 疑問文イントネーションのアクセント法則、シンタクス、強調等が複雑に入り組んだ構造を主として Bierwisch の方法にのっかって見てきたが、これらの法則がイントネーション全体、更にはより大きな、文法全体の中のでも通用するためにはまだいくつかの条件が加味されていかなければならない。また、これらの法則を裏づけるような統計的に整理された資料を使用した研究も同時に必要であろう。これは特に、用法上正しい文と誤った文、正しいイントネーションと誤ったイントネーションを直感的に決定できない外国語の研究にとっては不可欠の要素であろう。David Crystal の 1969 年に出版された „Prosodic Systems and Intonation in English“ にみられるような、イントネーションを種々の韻律特徴の組合せと定義し、従来のイントネーション研究の単位であった文のイントネーションをいっさい考えずに、隣接の tone unit をふたつずつ取ってゆきながらひろげてゆく方法も、この点で興味ぶかい。

ここで扱わなかった疑問文のタイプとして例えば *Hast du das Buch nicht gesehen* (↑)等の否定を含む疑問文がある。

例に用いた疑問文の文法上の形態が統一されていないために、規則の適用過程が十分に簡潔でないのは、イントネーションの型をレコード、テープ、ドイツ語を母国語とする情報提供者に基づいた資料に頼らざるをえなかったためである。

注

- ① 安倍勇「疑問文のイントネーション」にあげられた Bolinger “Aspects of Language” 1968 の「眼をみはる」等のジェスチャーが疑問文を叙述文から区別する唯一の方法となる例にもみられるように、動作や表情のみで叙述文を答えを期待する文にかえることが可能である。また *Du hast also das Buch gelesen* (↓)も答えを期待する文として通用する。従って「疑問」は言語学上のカテゴリーとは言えない。
- ② 疑問文の構造は Katz-Postal によると以下の通りである。



Sは文、Qは疑問形態素、Nukleusは核

この構造を変形規則によって疑問文の形にかえる。

- ③ イントネーション記述にとっては絶対的な音の高さも、ある話者の声の量に対する相対的な音の高さも無関係である。関係があるのは、その表現内の相対的な音の高さのみである。Bierwisch (1966) S. 133ff 参照
- ④ 本稿で用いた例文は以下の資料の観察に基づいたものである。  
Braun-Nieder -Schmoe : Deutsch als Fremdsprache  
II, Aufbaukurs. Stuttgart 1968 のテープ  
岩崎英二郎/塩谷饒 : 白水社ドイツ語講座 I, II, 東京1968年のレコード  
Linguaphone Institute : Linguaphone Deutscher Kursus のレコード  
Oguri-Schümer-Friedmann-Takizawa : Einführung in die deutsche  
Sprache. 東京1969年のテープ2種類
- ⑤ Schümer /Takizawa S.14参照
- ⑥ Bierwisch (1966) S. 150ff による。
- ⑦ \*印は文法にかなっていない語又は文を示す印である。

#### 文献

- 安倍 勇 : 英語の抑揚。現代英語教育講座4, 「英語の発音」研究社 (1965)  
1969<sup>7</sup>  
—— : 疑問文のイントネーション。英語青年, 第116巻第9号, S. 528f.  
Barker, M. L. : A Handbook of German Intonation. Cambridge 1925  
Bierwisch, Manfred : Regeln für die Intonation deutscher Sätze.  
In : Studia Grammatica VII, Berlin 1966  
—— : Grammatik des deutschen Verbs. Studia Grammatica II, Berlin  
1967<sup>5</sup>.  
Egan, Alfred : A German Phonetic Reader. London 1927.  
Essen, Otto von : Grundzüge der hochdeutschen Satzintonation.  
Ratingen 1964.  
現代英語教育講座3, 「新言語学の解説」研究社 (1965) 1967<sup>5</sup>  
Isasčenko, Alexander V. und Schädlich, Hans Joachim : Untersuchun-  
gen über die deutsche Satzintonation. In : Studia Grammatica VII,  
Berlin 1966.  
Kiparsky, Paul : Über den deutschen Akzent. In : Studia Gramma-  
tica VII, Berlin 1966.  
Kufner, Herbert L. : The Grammatical Structures of English and  
German, Chicago 1962.  
Neyer, Franz-Anton : A Contrastive Phonologie of Japanese and



German. Unpublished Master-Dissertation, Georgetown University Washington D. C., 1967.

Vermeer, Hans J. : Kurzgefaßte deutsche Lautlehre (Übersicht), Heidelberg 1967.

Wängler, Hans-Heinrich : Grundriß einer Phonetik des Deutschen, Marburg 1960.